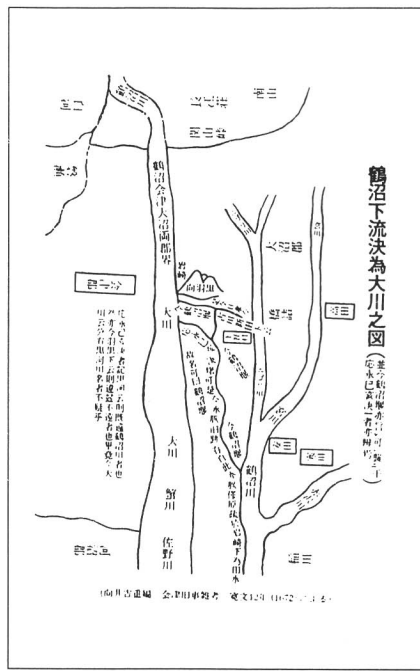


ら、この白鬚の水まで一七七年の間は、応永の大洪水で南会津地方より流れてきて、本郷の岩崎山の麓から西に、橋瓜村よりは西北に、更に安田村から北流して坂下村を経て日橋川と合流し阿賀川となっていた。ところがこの白鬚の水によって、応永二十六年以前の昔の河道に戻り、本郷村より北に流れ、蟹川村、佐野村を通る現在の大川（阿賀川）となったといわれている。流路の変更によって、岩崎山の麓から橋瓜村の間の旧河川敷は陸地と変わり、安田村から坂下村までは川幅が狭くなって現在の鶴沼川となった。陸地となったところはもとより、川幅の狭くなった流域など旧河川敷には沢山の新田が開発され、多くの集落ができた。

左図は寛文十二年の会津旧事雑考にある鶴沼下流決為大川の図である。



鶴沼下流決為大川の図

一二 思整堀（岩崎堰）の開削

前項に述べた白鬚水は鶴沼川（大川）の流路が変更するほどの大洪水なので、橋瓜組や中荒井組の大半の堰はもとより、殆んどの堤や田圃が破壊され、灌漑用水はもとより生活用水まで差し支えるようになった。

当時、この地方の用水として、一部鶴沼堰を利用するほかは、湧出する清水や大小の多くの堤の水を堰で通水して使用していた。それが白鬚水の大洪水のため破壊された。そのため田畑の耕作も困難となり、農民に離農者がでるほど難渋したので、葦名家家臣小森備後守が「本郷村岩崎の麓より取水して、それを灌漑用水としたら」と具申して承認され、次の頁の文書に記してあるように、弘治年（一五五五〜一五五八）中に工事を始め、完成したのが天正年（一五七三〜一五九二）中の始めで、およそ二十数年の大事業であった。